

緒 言

－『国史纂集』の復刊について－

『国史纂集』は、別府大学日本史研究室により昭和 44 年（1969）に創刊号が刊行され、その後、第 26 号が平成 9 年（1997）に刊行されるまで継続して刊行されました。その後、刊行が途絶えていましたが、今年（2025）、別府大学大学院史学・文化財学専攻の大学院生（大学院修士^{しげみ}生も含む）、及び、大学院担当教員が寄稿する学術雑誌として復刊することになりました。

『国史纂集』の創刊号には、後藤重巳先生（別府大学名誉教授）が御執筆された文章がありますので、以下に引用させていただきます（原文は縦書き。原文の改行箇所は適宜変更した）。

－国史纂集の発刊にあたって－

日本史研 後藤重巳

「国史纂集」と命名される日本史研究生の研究機関誌が生ぶ声を上げると聞く。よろこばしい限りである。

多分、昨年（引用者注：1968 年カ）十二月二十日頃だったと記憶しているが、私は屋敷裏庭の六〇坪ばかりの畑に、大根・白菜・春菊を播種した。

播種の適期を若干逸してはいたのだが、種を播いてさえおけば、芽を出し、生育するものと信じていた。夏時分と異なり、二・三日遅れはしたものの、果せるかな一応芽を出した。

しかし、生育状態はきわめて不良で、一ヶ月以上を経た今日でさえ、大根は才三葉がやっとのぞき始めた程度である。

伊勢暦や靖国暦には、農事暦として野菜の播種期を非常に巾狭い時期の間に限定している。我々が、学問を始める時、そこには同様に当然適期が存在するものと考えられる。俗に「四十の手習」などという語があり、古人の中には、晩学の例をいくつか数える。

しかし、生育が良く、良質の大根を得るためには、播種の適期を逸してはならない様に学問もまた然りではあるまいか。

「国史纂集」の創刊が、こうした意味で、学問という大樹の植えつけの期にたとえられるべき研究発展の契機にならんことを期す。発展のために余程の努力を望むものである。

上記の後藤重巳先生による創刊号の文章を拝読して思うことは、最後の箇所の「発展のために余程の努力を望むものである」という文言が印象的であり、この文言は歴史学に取り組む者にとっての学問の厳しさを教えていただいたように思うので、別府大学大学院史学・文化財学専攻の大学院生と共に、今後も学問に精進していく時の金言として受け止めたいと思う次第です。

令和 7 年（2025）9 月吉日

別府大学大学院史学・文化財学専攻長
白峰 旬